

---

# 企画展とフォーラムの経過・記録

---

吉岡康暢

## I 企画展「陶磁器の文化史」

- 1 名古屋市博物館との共催事業として、展示プロジェクト・チームを立ち上げ、平成8（1996）～平成10（1998）年度の3か年にわたり研究発表と展示案を検討した。これをうけて、平成10年3月24日～5月5日に千葉展（国立歴史民俗博物館）、5月23日～6月21日に名古屋展（名古屋市博物館）を開催した。
- 2 展示プロジェクト研究会で討議を重ね成案とした、展示の主旨・構成・資料および展示プロジェクト委員は、以下の通りである。

### (1) 展示の主旨

最新の陶磁器研究の成果に、考古学と美術史を総合した陶磁社会史の視点から3テーマを選び、“人・モノ・技”の「交流」の諸相を探る。[第1部]は、広大な海陸のセラミック・ロードを介するアジアとイスラム世界の交流、前近代で世界の陶業を主導した中国と朝鮮半島、日本列島をはじめとするアジアの古代～近世の地域史が、陶磁器のモデルとコピーの比較を通して浮き彫りにされる。とくに、中世の瀬戸陶器と高麗青磁の誕生、近世の肥前陶器のヨーロッパ進出に焦点をあてる。[第2部]は、焼き物が持つ日常食器と異なる顔、権力と富のステータス・シンボルとしてのカワラケと高級陶磁を、中世都市論とかかわらせてとりあげる。そこでは、新安沈船をモデルにした貿易船の模型と積載された「唐物」や、戦国大名朝倉邸への「將軍御成」のさいの「室礼」（座敷飾り）が復元され、大名居館出土の美術・骨董陶磁と名物の伝世品、京・堺の町衆が使った茶陶などの数々が展示される。[第3部]は、近世の陶業革新の頂点を極めた、肥前（鍋島・柿右衛門など）と京（仁清・乾山）の「飾られた器」と、絵画・染織・漆工・金工などのモチーフの交流を主題に、桃山～元禄文化の意義を考える。

### (2) 展示の構成

#### 第1室 アジアの陶磁器文化交流

##### A 唐三彩と奈良三彩

- ①唐三彩とアジアの三彩
- ②奈良三彩の誕生
- ③平安緑釉陶への変容

##### B 瀬戸の施釉陶器と中国陶磁

- ①中世施釉陶の成立—灰釉陶器の伝統と革新
- ②鉄釉陶の出現—茶陶と仏器

C 陶磁器交流の広がり

- ①アジアの陶磁器 ②国際貿易都市の陶磁器

D 列島への磁器技術の導入—近世の陶業革命

- ①陶器成立前夜—唐津窯の動向 ②磁器登場—肥前窯と大陸・半島の陶技 ③肥前の窯業技術

E 海を渡った肥前磁器

- ①海外需要による生産—色絵磁器の展開 ②海外への影響—肥前の陶磁を写したヨーロッパの陶磁器

第2室 陶磁器が語る権力と富

A 都への憧れと東国

- ①奥州平泉の陶磁器 ②武士の都・鎌倉の陶磁器 ③刻画文陶器

B 唐物を運んだ貿易船

- ①新安沈船の復元 ②新安沈船の積荷と日元貿易

C 戦国大名と唐物荘厳

- ①権力を表現する陶磁器—越前朝倉氏と一乗谷 ②「將軍御成」と唐物荘厳—陶磁文化の規範 ③伝えられた価値感 ④城館出土の陶磁器とカワラケ

D 都市の賑わい

- ①自由都市・堺 ②京の都・三条界限

E 絵巻物に描かれた陶磁器

- ①生活の場と陶磁器 ②中世人の陶磁器をみる目

第3室 躍動する文様

A 交流するモチーフ—近世陶画の原型

- ①雛形本のモチーフ ②『八種画譜』の文様 ③鍋島と絵手本 ④幾何学的デザイン

B 時代の意匠—陶画と染織・漆工・金工のデザイン

- ①織部と辻が花 ②青手と金碧障壁画 ③光琳模様 ④青の時代

(3) 展示資料

国宝・渥美秋草文壺（慶応義塾大学）、重文・二彩浄瓶（円寿寺）、重文・瀬戸灰釉魚文瓶子（名古屋市博物館）、重文・白磁輪花鉢（静嘉堂文庫美術館）、重文・青磁茶碗 銘 馬蝗絆（東京国立博物館）、重文・油滴天目茶碗（文化庁）、重文・織部松皮菱形手鉢（北村美術館）、重文・金沢貞頭書状（神奈川県立金沢文庫）、重文・洛中洛外図 歴博甲本・乙本（国立歴史民俗博物館）

その他陶磁器約 350 件、屏風・衣装・金工・漆工品など約 50 件

(4) 展示プロジェクト委員（\*は代表者，所属は平成8年現在）

荒川 正明 出光美術館	玉蟲 敏子 静嘉堂文庫美術館
大橋 康二 佐賀県立九州陶磁文化館	藤澤 良祐 瀬戸市埋蔵文化財センター
荻野 繁春 福井工業高校専門学校	村上 伸之 有田町歴史民俗資料館

森本 朝子 考古学	日高 薫 本館情報資料研究部
吉田 恵二 國學院大學文学部	藤尾慎一郎 本館考古研究部
小野 正敏 本館考古研究部	丸山 伸彦 本館情報資料研究部
小島 道裕 本館歴史研究部	*吉岡 康暢 本館考古研究部
高橋 照彦 本館考古研究部	

## II フォーラム

- 1 千葉会場の展示期間中、平成10年(1998)4月19日(日)、国立歴史民俗博物館講堂で、第27回歴博フォーラム「陶磁器が語る日本とアジア」を(財)歴史民俗博物館振興会と共同で開催した。
- 2 フォーラムの主旨・内容は下記の通りである。発表内容は補訂を加えれば本書に収録されているが、コメンテーター弓場紀知・片山まび・岡野智彦の諸氏の内容は変更されているので、フォーラムの記録を参照されたい。
- 3 本企画展用に中国貿易船の模型を製作した。模型は1323年に朝鮮半島南西木浦沖で沈没した新安沈船を参考とし、大韓民国国立海洋遺物展示館の協力をえ、金在瑾国立ソウル大学名誉教授に監修、元仁古代船舶研究所(代表李元植、龍仁市白岩面石川里723)に製作を依頼した。
- 4 企画展関連の歴博講演会 村上伸之「伊万里焼の誕生と朝鮮・中国」(1998・3・14)。
- 5 (財)歴史民俗博物館振興会「陶磁器の文化史」(A4版、213頁)(1998・3・24)。

### (1) フォーラムの主旨

企画展示「陶磁器の文化史」は、陶磁器が発信する生活史・産業史・都市史・女性史、あるいは国家史・アジア史などの各時代、各分野にわたる情報から、“人・モノ・技”の「交流」にかかわる三つのテーマを選び、陶磁器および関連する工芸品約400件を陳列しています。そこでは、①中国を中心とする古代～近世の陶芸文化の広がりやに映し出されたアジア地域史の諸相、②中世の権力と富のステータス・シンボルとしての高級唐物陶磁、③近世陶業の革新を語る“飾られた器”と時代のファッション、が考古学と美術史の研究成果を総合した考古美術史の視点から演示されています。

今回のフォーラムは、展示場で十分表現しきれなかった“交流のシステム”や“陶磁器の使われ方”を中心に、流動する時代背景と結びつけて、生活文化総体のなかで「日本とアジアの交流史」として今日的な視座から見直そうとするものです。死者のための飾られた器としての唐三彩はどのような国際交流を通して誕生し、日本の三彩は唐三彩とどこがちがうのか？ 戦国大名はなぜ、どのような「場」で中国の骨董陶磁を展示したのか？ 朝鮮や東南アジアと日本の陶業の変革期は連動するのか？ 「鎖国」といわれてきた江戸時代に、どうして日本の陶磁がヨーロッパ市場を席捲できたのか？ 長屋の熊さん・八つあんはいつごろから磁器の飯碗を使い始めたのか？ などの話題について、会場の皆さんと一緒に考え、大いに論じたいと思います。

---

## (2) フォーラムの構成

- 10:00~10:05 開会挨拶 佐原 真 (国立歴史民俗博物館館長)
- 10:05~10:10 主旨説明 吉岡康暢 (国立歴史民俗博物館)
- 10:10~10:50 報告1 三彩・緑釉陶の展開—その歴史的 position を中心に— 高橋照彦 (奈良国立博物館)
- 10:55~11:35 報告2 戦国大名と唐物荘厳 小野正敏 (国立歴史民俗博物館)
- 11:40~12:20 報告3 海を越えた日本の陶磁 大橋康二 (佐賀県教育庁)
- 休憩 (12:20~13:30)
- 13:30~14:10 報告4 江戸の暮らしと陶磁器—「雑器」が語る文化— 長佐古真也 (東京都埋蔵文化財センター)
- 休憩 (14:10~14:25)
- 14:25~16:25 討 論
- 司 会 吉岡康暢
- パネラー 弓場紀知 (出光美術館)
- 矢島律子 (町田市立博物館)
- 大橋康二
- 長佐古真也
- 小野正敏
- 高橋照彦
- コメンテーター
- 西田宏子 (根津美術館学芸部長)
- 森本伊知郎 (跡見学園中学・高等学校)
- 片山まび (東京大学大学院附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
- 岡野智彦 (中近東文化センター)
- 岩淵令治 (国立歴史民俗博物館)
- 16:25~16:30 閉会挨拶 斎藤夫美雄 (財)歴史民俗博物館振興会)
- 進行 篠原 徹 (国立歴史民俗博物館)

## (3)

国立歴史民俗博物館・(財)歴史民俗博物館振興会『陶磁器が語る日本とアジア』(A4版, 38頁)。